

『チープサイドの貞淑な乙女』(1613) にみる 生徒と教師のクィアなモーメント

杉浦裕子

はじめに

トマス・ミドルトン (Thomas Middleton, 1580-1627) の『チープサイドの貞淑な乙女』(*A Chaste Maid in Cheapside*, 1613, 以下、チープサイド) と略記) は四つの筋が絡み合う市民喜劇である。金細工師イエローハンマーの娘モルとタッチウッド・ジュニアの恋愛プロットを主軸としながら、そこにオールウィット夫妻と妻の不倫相手のサー・ウォルター・ホアハウンドを巡るプロット、子供ができないキックス夫妻とタッチウッド・シニアを巡るプロット、金細工師の息子ティムとウェールズの婦人の結婚プロットの三つが絡む。本論が着目するのは、このうち最後に挙げたもっともマイナーな筋に登場するティムという若者である。ティムは、タイトルロールである「貞淑な乙女」モルの兄で、ケンブリッジ大学の学生という設定である。彼は父イエローハンマーが決めた結婚相手に会うためにロンドンに帰省してくるが、そこになぜかティムの個人教師(以下、チューターと表記)もついてくる。ティムの婚約者というのは実はサー・ウォルター・ホアハウンドの情婦だったウェールズの婦人であるが、イエローハンマーは彼女がサー・ウォルターの「姪」で十九の山を相続予定のお嬢様だと騙されている。またイエローハンマーは娘モルをサー・ウォルターと結婚させる算段であり、つまり息子ティムも娘モルも父親の投資の元手である。しかしモルが恋人と駆け落ちを試みるなど、強いられた縁談に抵抗し続けるのに対し、兄であるティムの結婚プロットはかなり扱いが軽い。本劇が四つのプロットから成ることを明快に示したりチャード・レヴィンは、ティムとウェールズの婦人の結婚という第四プロットについて、モルとタッチウッド・ジュニアの結婚という第一プロットと対照を成す笑劇でロマンチック・プロットの裏返しであると捉え、ティムに対しては反感も湧かないが共感も抱けないと述べる (Levin 21)。しかしながら、ティムにはクィア批評の観点から着目したい点がある¹⁾。それ

はティムが異性愛結婚そのものに抵抗を示している点、そしてティムのすべての登場場面でチューターが同伴している点である。ティムの主要な登場場面は3幕2場と4幕1場であるが、彼は4幕1場でウェールズの婦人と対面して結婚を決意した後も、散発的に登場する際には常にチューターと一緒にいる。ティムは「おバかな大学生」としてアカデミズムに対する風刺的存在と捉えられがちだが、本論ではそれだけではないティムの存在意義を、彼をとりまく「クィアなモーメント」²⁾から分析したい。その際、「クィア」という語を、ジュディス・バトラーの言う「行為遂行性」³⁾の内部で、力と対立の、安定性と可変性の地位を問いただす呼びかけとして現れる」(2021: 309, 傍点ママ) ものとして考え、本論の中での「クィアなモーメント」を以下の三点に見出す。一点目は、ティムが「家父長制言説」と「異性愛規範」を揺るがす契機/瞬間、二点目は、ティムの「2プラス1」の結婚生活が予測される瞬間、三点目は、学校教育という制度が内包する規範からの逸脱である。

1. ティムが「家父長制言説」と「異性愛規範」を揺るがす瞬間/契機

まずティムという人物自体に、規範を揺るがす「クィアなモーメント」が大きく分けて二つ見出される。一つは「家父長制言説」に対するティムの言語感覚である⁴⁾。ティムとチューターがラテン語で三段論法にふける場面(4幕1場)で、ティムは横から議論に割り込もうとする母モードリンに、得意げに「論理」(logic)の万能性を説明する。

Tim. [...] but bring forth what fool you will, mother, I'll prove him to be as reasonable a creature as myself or my tutor here.

Maudline. Fie, 'tis impossible.

Tutor. Nay, he shall do't, forsooth.

Tim. 'Tis the easiest thing to prove a fool by logic;

By logic I'll prove anything.

Maudline.

What, thou wilt not!

Tim. I'll prove a whore to be an honest woman.

(IV. 1. 35-41, Underlines added)⁵⁾

論理を使えば「阿呆が理性的動物であるという証明」が簡単にできるだけでなく、「娼婦を貞淑と証明することもできる」とティムは言う。しかしそもそも「娼婦」や「貞淑」という女性の格付けは、家父長制を維持するために女性の身体を囲い込む言説にすぎない。バトラーが、『私』は呼ばれ、名付けられ、…呼びかけられることによってのみ存在するようになり、この言説的構築は『私』に先行して生起する(2021: 309)、「名付けは境界を設定すると同時に規範を反復的に教え込む(13)というように、特に家父長制社会の下で女性は、生まれて「女の子」と呼ばれた瞬間から、男性に従属するものとして名付けられ、存在するのだ。「娘」や「妻」としては父や夫に「従順」であることを教え込まれ、「独身女性」や「娼婦」は逸脱した存在とみなされた⁶⁾。しかしティムが論理で「娼婦」を「貞淑」と証明する試みは、「娼婦」や「貞淑」といった家父長制規範の中で繰り返し引用される名付け・言説が、貼り替え可能で不安定なラベルであることを暴く行為と言え。そしてティムは劇の最後で娼婦と結婚してしまったことで、このラベルの貼り替え作業を自ら実践せざるを得なくなるわけだが、その場面については後述する。

ティムが内包するもう一つの「クリアなモーメント」は、異性愛結婚というジェンダー規範にとらわれない彼の身体性にある⁷⁾。再びバトラーを引用すると、「ジェンダー規範は、男性性と女性性のある種の理想の身体化を要求することで機能するのであり、その身体化はほぼ常に、異性愛的な絆の理想化に結びついている(2021: 317)。従って、親が子供の結婚相手を決めることも、異性愛結婚という規範を強制的に遂行させる行為である。金細工業を営む両親にとって、ティムは長男としてできるだけ財のある嫁を娶らせるべき存在であり、母モードリンが「あの子たちときたら大学で男ばかりに囲まれて、女性とつきあう教育を受けてないのよね」(“In the university they're kept still to men,/And ne'er trains up to women's company.” III. 2. 116-17)と心配するのも当然だ。しかし見知らぬ女性と息子を結婚させようとする親の常識は、ティムには不可解である。

Tim. I mar'l what this gentlewoman should be that I should have in marriage. She's a stranger to me.

I wonder what my parents mean, i'faith,

To match me with a stranger so,

A maid that's neither kith nor kin to me.

Life, do they think I have no more care of my body than to lie with one that I ne'er knew, a mere stranger, one that ne'er went to school with me neither, nor ever play-fellows together?

(IV. 1. 83-91, underlines and bold added)

僕が結婚するという相手の女性は、一体どんな人なんだろう。全然知らない人だぜ。

親父とお袋の気がしれないよ。

僕をまったくの他人と結婚させようなんて、

ご近所さんでも親戚でもないのに。

まったく、両親は僕が自分の体をその程度にしか大事にしないと思ってるのかな。

全く知らない、一緒に学校に行ったことも、一緒に遊んだこともない赤の他人と寝るなんて。

ティムにとっては、「赤の他人」と寝ることは自分の体を大事にしないことである。当時、女子たちのほとんどがグラマー・スクール教育から締め出されていたことを考えると⁸⁾、「一緒に学校に行ったことも、一緒に遊んだこともない赤の他人」とは女性一般と考えていい。つまりティムは自分の身体を、「女性と寝るべき身体」とは捉えておらず、ティムの身体性がジェンダー規範の強制的引用に抵抗しているのだ。逆に言えば、学友同士なら一緒に寝ることに抵抗がないということで、当時よくあった「同性同士のベッドの共有」という文化をも想起させる⁹⁾。

このようにティムの言語感覚と身体性には、家父長制言説と異性愛規範を揺さぶる瞬間が見出されるが、これらのモーメント発現の源が、ティムが受けた教育制度にあるのではないかというのが本論の仮説である。以下、大学のチューター制度とグラマースクールでの教育制度を概観しながらこの点を考察したい。

2. Tim の「2 プラス 1」の結婚生活?

4幕1場の後半でウェールズの婦人と対面したティムは、しばらくラテン語とウェールズ語でとんちんかんな会話を交わした後、婦人にキスされて恍惚となることから、女性忌避者というわけではない。一方で、

親の強制に屈せず恋人との結婚を勝ち得たモルとは対照的に、ティムは親に利用されて娼婦と結婚させられる気の毒な息子でありながら、ティムの描かれ方にあまり悲壮感がないのは、常時一緒にいる彼のチューターの存在ゆえではないだろうか。ティムのチューターには固有名詞さえなく、背景も描かれておらず、ティムは一貫して「先生、先生」(tutor, tutor)と呼びかけるが、この「先生」という職業的愛称には特別な親しみが込められている可能性もある。一体、ティムとチューターの師弟関係はどういうものなのか、またそもそも当時の大学におけるチューター制度とはどのようなものだったのだろうか。

2-1. 大学のチューター制度からみるティムとチューターの関係

オックスフォード大学およびケンブリッジ大学のカレッジ(学寮)におけるチューター制度は1560年代に始まり、70年代から急速に広まった。たとえばオックスフォードでは、エクセター・カレッジが1564年、ベイリオル・カレッジが1572年、ブレイズノーズ・カレッジが1576年、ユニヴァーシティー・カレッジが1583年にチューター制度を始めた(Lawrence Stone 'The Size and Composition' 1974: 25)。これは大学に地方の貴族やジェントルマン階級の子弟たち、聖職者を目指さない学生、学位をとるのが目的ではない学生などが増えたことで、様々な学生の個々のニーズに応えるために作られた制度だった(Stone 1974: 24-25; Rosemary O'Day 'Room at the Top' 1984: 36)。チューターという立場は、個人指導教師としてアカデミックな指導をただけでなく、将来の職業見込のアドバイス、授業料を払えるようにするための財産管理、さらには学生のモラル面での監督責任もあり、ある意味今日の大学教員に求められる学生指導よりも踏み込んだ業務を行っていた(O'Day *Education and Society* 1982: 113, 130)。チューターはしばしば学生の親と面

談や手紙のやりとりをして、親から直接に謝礼を支払われたため、誰を指導するか、何人指導するかが直接収入に関わり、それゆえ次第にチューターたちは裕福な階級の子弟を世話したがるようになった(Stone 1974: 26; O'Day 1984: 34; 'Universities and Professions' 2009: 91)。チューターと学生はおなじ学寮内で過ごし、部屋を共用することもあったし、休暇を一緒に過ごすこともあった(Stone *The Family, Sex, and Marriage* 1977: 516-17; O'Day 2009: 91)。チューターの中には自分の部屋に貴族・ジェントルマン階級の学生ばかり集める人もいたらしい(O'Day 1984: 35)。

また、チューターはフェローとよばれる専任教員だけでなく、大学院生になることもあった(O'Day 1982: 115, 118)。ティムのチューターも、「急いで、ねえ先生、走って」("Run, sweet tutor, run!" IV. 2.8)と学生に行動を促されたり、ラテン語の間違いがティムと同程度であることを考えると、そこまで歳の差のない大学院生か若い教師の可能性が高いだろう。

次に、ティムについてももう少し背景を探ってみたい。当時の大学では学生側の立場にも区分があり、上級の身分から順に表1のようになっている¹⁰⁾。

ティムの父親イエローハンマーは、希少なゴールドを扱う金細工師(goldsmith)で、商人・職人階級(traders)の中では最上位におり、当時はチープサイドというロンドンの商業の中心地の中でも金細工師が住む通りが最も栄えていた¹¹⁾。ナイト爵位を持つサー・ウォルター・ホアハウンドがイエローハンマーの娘と結婚しようとするのも、双方にとって利益になるからに他ならない¹²⁾。したがって裕福な金細工師の息子のティムはおそらく自費生と思われるが、特別自費生とまではいかないだろう。なぜなら特別自費生の大半を占めるジェントリー階級以上の出身者は学位の取得率が低かったのに対して¹³⁾、ティムは学位取得間近であるし、また劇冒頭のイエローハンマー夫妻の会話に「息子が特別自費生とホールで一緒に食事をする

【表1】 学生の区分と出身階級

fellow commoner / gentleman-commoner	フェローと一緒にテーブルで食事をする特権を与えられた特別自費生	ほとんど貴族やジェントリー階級以上
commoner (Oxford) pensioner (Cambridge)	自費生	ジェントリー階級以上が大多数
scholar / exhibitioner	奨学生・給費生	ジェントリー階級もいるが聖職者や商人職人階級、ヨーマン階級の子弟が多い
sizar / servitor	フェローや他の学生の下僕を務める義務つきの給費生	聖職者、商人職人階級、ヨーマン階級、農夫の子弟

機会のために銀のスプーンを送った」(“[...] you sent him the silver spoon to eat his broth in the hall amongst the gentleman commoners.” 1.1.56-58) というやりとりがあり、息子と特別自費生を区別しているからだ¹⁴⁾。

ティムは大学内に増えつつあった貴族やジェントリー階級ではないが、実家が裕福な自費生ならば、チューターにとっては世話をするメリットが多少あったかもしれない、実際、母親がチューターに「鴨のパイ」を贈ったことが劇中で言及される¹⁵⁾。しかし劇中のチューターとティムの両親が初対面であることから、これまで数年間ティムを間に介しながらも両者のつながりがあまり太くないこともわかる¹⁶⁾。また劇中、チューターはティムの母親とは社交辞令程度の会話を交わすが、父親のイエローハンマーとは一度も言葉を交わさず、チューターの方から両親に阿る様子も全くない。それにも拘らず、卒業間際のタイミングになって、ティムの縁談を兼ねた帰省にチューターもくっついてきたのは、どういうわけか。チューターの目的は両親に会うことではなく、あくまでティムと一緒にいることだと言えないだろうか。

2-2. 大学の外、あるいは卒業後も続くチューターと生徒の関係

ティムの舞台への登場回数は多くないが、5幕2場では、親に閉じ込められて死にそうな妹のためにチューターと一緒にラテン語の追悼詩を作成中だということが報告され、舞台裏でもティムとチューターと一緒に過ごしている様子が窺える。ロンドンの実家でもラテン語の議論や詩作にふけるティムとチューターは、いわば大学の外で「課外授業」を続けている状態といえる。ウォルター・オングによると、特にラテン語は、当時知の源泉にアクセスするための言語で、教育を受けた男性の特権であったと同時に、閉ざされた男性社会に入るためのイニシエーションでもあり、団結心を育む秘密の言語だった (Ong 109)。またブルース・スミスは、ラテン語が男性のパワーを表す公的言語であると同時に、男性たちの性的欲望、とりわけ同性愛的欲望を表す私的言語でもあったと述べる (Smith 83-84)。ティムの母親が「日がな一日議論ばかりして」“Here’s nothing but disputing all day long with ‘em!” IV. 1.21-22) と呆れるほどラテン語での議論にふけるティムとチューターは、他人の入りこめない二人だけの空間を作り出していると言える。しかしエリザベス朝喜劇においてラテン語授業やラテン語教師がしばしばパロディ化して描かれるように¹⁷⁾、ティムとチュー

ターのラテン語議論の場面も、間違いが散見される上に、ラテン語の「芸術 (ars)」と英語の「お尻 (arse)」との地口にモードリンが大喜びするなど、男二人のラテン語空間はあくまで喜劇的に描かれる。

その一方、ティムが結婚を決意するのをもまた、まがりなりにも学問を尊ぶゆえであることも付言しておきたい。ウェールズの婦人が話すウェールズ語を解せなかったティムは、彼女をヘブライ語が話せる「博識な学者」だと勘違いし、周りから学識ある夫婦と思われるという妄想が、彼を結婚へと後押しするのだ。

Tim. By my faith, she’s a good scholar, I see that already: She has the tongues plain; I hold my life she has travelled. What will folks say? ‘There goes the learned couple!’ Faith, if the truth were known she hath proceeded!

(IV. 1. 129-133, underlines added)

引用下線部の“travel”は“travail”(性的に励む)との掛け言葉、“proceed”は「学位を取る」と「処女を卒業する」の二重の意味をもち、表面的には「きっと彼女は外国にも行って、学位も取ったんだ」という意味だが、その裏で「彼女は実はもう処女を卒業しているどころかたくさん経験してきたはず」という意味にもなり得る¹⁸⁾。先にみたように「娼婦」と「貞淑」の境界を消失させる言語感覚を持つティムは、無自覚にウェールズの婦人の正体を暴くアイロニーを述べているわけだが、ティムにとっては娼婦の「女性的身体」が、外国語を話せるという「男性的な語学力」に見えてしまうことで、彼女を身近に感じているのだ。

その後もティムは、婚約によって自分とチューターとの関係が変わることなどないかのように振る舞う。ティムは卒業間近であるが、ローズマリー・オデイによれば、学生同士の友情だけでなくチューターと学生の友情が、卒業後も「生涯の関係」として続いた事例は『英国人名辞典』を紐解けばよく見つかるという (O’Day 2009: 92)。大学の外や卒業後も続く学友同士や学生とチューターとの友情は、同じ学寮内や同じ部屋で勉強と生活をともにした彼らの、断ち切り難い関係性・身体性・欲望と紙一重といえるだろう。

2-3. 「2プラス1」の結婚生活の可能性

最終場では、ウェールズの婦人と結婚したティムの結婚生活が「2プラス1」になるというクィアなモーメントが発動する。モルとタッチストーンが無事に結

ばれ、皆に祝福される大団円の最中、結婚相手が娼婦だったことを知ったティムが「大学まで出たのに、ロンドンで娼婦と結婚するなんて！」と嘆きながら登場する場面である。

Tim. Come from the university
To marry a whore in London, with my tutor
too!

(V.4.86-87, underline added)

興味深いことに下線部の“with my tutor too”は、「先生がついていながら」という意味と同時に、「先生も一緒に（結婚する）」という意味にもなり、ティムの結婚生活にチューターが付随する可能性が見える瞬間である。また、母親に「もうどうしようもないんだから、自分の妻を貞淑と証明してみなさい」(“There is no remedy now, Tim;/You must prove her so [=honest] as well as you may.” V. 4.105-6)と言われたときも、ティムは「だったら、先生と一緒に、できるだけやってみるよ」(“Why then, my tutor and I will about her/As well as we can.” 107-8)と返す。つまりチューターの助力がないとティムはこの結婚に耐えられないのだ。ウェールズの婦人と母親は、論理を使わなくとも「結婚」によって妻が「貞淑」になることは可能だと主張するが、ティムは「ラテン語では娼婦でも英語では貞淑ということもできる」と言い、あくまで言説の上で「娼婦」と「貞淑」の境界を破ろうと試みる。

Welish Gentlewoman. Sir, if your logic cannot
prove me honest,

There's a thing called marriage, and that
makes me honest.

Maudline. O, there's a trick beyond your logic,
Tim.

Tim. I perceive then a woman may be honest ac-
cording to the English print, when she is a
whore in the Latin; so much for marriage and
logic!

(V.4.110-15, underlines added)

女性陣とティムはどちらもラベルの貼り替え作業を試みる点で共通しているが、ティムはあくまで論理でそれを行うことにこだわり、そこにチューターの助力が欠かせない。

実は『チープサイド』では、第二のプロットのオーウェット夫妻も、第三のプロットのキックス夫妻も、第三者が深く絡む「2プラス1」の結婚生活となっており¹⁹⁾、この形態が本劇全体に敷衍できるものであることを考えれば、ティムとウェールズの婦人の結婚生活が「2プラス1」となる可能性にも不思議はない。ティムの妻が「この結婚には最初から三人が関わっていた²⁰⁾と口にする日も近いかもしれない。

では、大学生とチューター間のクリアな欲望は、大学という場で初めて花開いたものなのだろうか。次節では、その種がすでにグラマー・スクールの制度内で植え付けられていることを検証したい。

3. 学校教育制度が内包する規範からの逸脱

3-1. グラマー・スクールでの鞭打ち

3幕2場では、大学生ティムのグラマー・スクール時代が垣間見える。実家に帰省したティムが初登場する場面であるが、母親はまだティムを幼い子供のように扱い、グラマー・スクール時代の話を持ち出す。

Maudline. Why, how now, Tim?

Will you not your old tricks yet be left?

Tim. Served like a child,
When I have answered under bachelor!

Maudline. You'll never lin till I make your tutor
whip you; you know how I served you once
at the free-school in Paul's church-yard?

Tim. Oh, monstrous absurdity!

Ne'er was the like in Cambridge since my
time;

Life, whip a bachelor? You'd be laugh'd at
soundly;

Let not my tutor hear you!

'Twould be a jest through the whole univer-
sity;

No more words, mother.

(3.2.132-142, underlines added)

モードリン：どうしたのティム？

まだ子供の頃のむずがる癖が治ってないのね？

ティム： 子供なりに扱われちゃね、
学士を取る条件を満たしたっていうのに！

モードリン：先生にお尻を叩かれないと直らないんだから。いつかもほら、セントポールの学校の中庭で、先生にお尻を叩いてもらった時のこと覚えていてしょう？

ティム：バカバカしい話はよしてくれよ！
 ケンブリッジでは一度もそんなことなかったよ。
 学士のお尻を叩く？ まったく大笑いされちゃうよ、
 先生に聞かせないでくれよ。
 大学中の笑いものになっちゃう。
 もう黙っててくれよ、母さん。

ここでは下線部で言及されているグラマー・スクールでの鞭打ちに着目したい。図1はチューダー朝の学校教室を描いた木版画であるが、左下にお尻を裸にして鞭打たれている生徒が描かれ、教師は手に持ったバーチ (birch) という樺材の枝で作ったムチを振り下ろそうとしている。右側で腰掛けているもう1人の教師も右手にはバーチを持っている。ローレンス・ストーンによると、16-17世紀前半は、それ以前に比べて子供への鞭打ちが増加し、それはこの時代のグラマー・スクール教育の拡充と関連している (Stone 1977: 163-64)。

古代からあった学校での鞭打ちという慣習は²¹⁾、ルネサンス期の英国においても「学ぶこと」とほぼ同義だったと言って過言ではない。学則でも公然と容認されていたし、オングによれば、鞭打ちも知の世界に入るためのイニシエーションだった (Ong 111)。特に16世紀以降に急速に普及したグラマー・スクール教育で、「男らしさ」の育成に欠かせないものとしてラテン語教育が重視されたが、正確なラテン語を覚えられないと鞭打ちが待っていた (同, 112-13)。つまりグラマー・スクールでの「ラテン語教育」と「鞭打ち」は切っても切れないものだったのだ。ティムも、母親の証言によれば単語の変化形さえなかなか覚えられなかったということで、グラマー・スクールで何度とな



【図1】 Schoolroom scene in Tudor times (woodcut, 16th century); Private Collection; out of copyright

く鞭打ちを食らったはずの少年である²²⁾。

この鞭打ちという身体的処罰に頼った教育方法が孕む矛盾を追及したのが、アラン・スチュワート (1997) とリン・エンターライン (2012) の研究で、風刺詩や裁判記録よりも当時の教師や生徒が書き残したものを具体的に検証しているのが特徴的である²³⁾。以下、この二人の文献を下敷きに当時の記録のいくつかを年代順に紹介したい。

1) ジョン・スタンブリッジの『ヴァルガリア』(1509年)²⁴⁾

「ヴァルガリア」(vulgaria) とは、教師たちが考案した英語とラテン語の各行翻訳の教科書群のことで、特にリリーによる文法書²⁵⁾が標準教科書として広まる前には、さまざまな教師たちがみずから教科書を考案した。「ヴァルガリア」はラテン語で「日常の言い回し (everyday sayings)」の意味で、教育の利点や教師と生徒の関係、マナー、宗教その他さまざまな主題について書かれている (Stewart 95)。この中で鞭打つ教師についてしばしば言及される。

文法学者で学校教師のジョン・スタンブリッジ (1463-1510) が書いた『ヴァルガリア』にも、鞭打ちの場面が描かれている。そこには「私の娘を結婚させるぞ (I shall marry my daughter to the)」という教師の台詞と、その後続く「先生が怖い (I fear the master)」という生徒の声がある²⁶⁾。教師が言う「私の娘」とは鞭のことで、「娘を生徒と結婚させる」というのは鞭打ちの婉曲表現である。鞭打ちという罰がエロティックな摂理の中に位置づけられているばかりか、「教師の鞭」と「生徒のお尻」の結婚は性的貫通をも連想させる (Stewart 97-98)。

2) ロバート・ウィットintonの『ヴァルガリア』(1520年)²⁷⁾

おそらくスタンブリッジに師事したとされる文法学者ロバート・ウィットinton (c.1480-c.1553) による『ヴァルガリア』にも、鞭打たれる生徒の声が書かれている。「今日は意に反してこっ酷く先生の娘と結婚した (I married my master's daughter today full sore against my will)」と、ここでも「教師の娘との結婚」という表現が用いられており、その後、教師の部屋で裸にされて鞭打たれたことをどうか誰にも口外しないでほしいという少年の哀願が描かれる²⁸⁾。ここには密室での罰にソドミカルな含意があると同時に、教科書の中で鞭打ちがこのような描かれることで、読み手で

ある生徒たちはこれが秘匿性のものであり、口に出すべきことではないことを擦り込まれたはずである (Stewart 99)。

3) トマス・タッサーの自伝的韻文「良き家政についての五百の指摘」(1573年)²⁹⁾

この自伝的詩の中で、トマス・タッサーは少年時代にその美声ゆえに誘拐され、セント・ポールズの少年聖歌隊に入れられたこと、その後セント・ポールズ・スクールからイトン・カレッジに送られてラテン語を学んだが、そこでニコラス・ユーダール (Nicholas Udall, 1505-56) という教師に鞭打たれた経験が回想される³⁰⁾。ユーダールは1534年から41年までイトンカレッジで校長を務め、1554年から56年にはウェストミンスター・スクールの校長を務めた教育界の要人だが、イトン時代に自分の教え子と何度も男色 (buggery) の罪を犯したことを裁判で告白し、マーシャルシー監獄に送られた。しかし、1533年の男色法 (Buggery Act) によれば男色での有罪は絞首刑に値するにも拘らず、彼は懲役一年で済んだばかりか、イトンでの職は失うがその後のキャリアに大きな打撃を受けたわけではなかった (Pittenger 1994: 164; Stewart 118)。アラン・スチュワートは、当時の男色の罪には「加害者と犠牲者」という概念はなかったこと、そしてユーダールと関わった少年トマス・チェイニー (Thomas Cheyney) がウルジー卿の妻の親戚だったと思われることから、この男色教師への関心の低さはよくあるもみ消しだった可能性を指摘する (Stewart 118-19)。

4) ジョージ・ギャスコインの詩「フィロメラの嘆き」(1576年)³¹⁾

フィロメラはギリシャ神話でよく知られる、義兄に犯されてナイチンゲールになった乙女であるが、このギャスコインの詩では、男性ナレーターがこの女性犠牲者に自己同一化する際に、自分の少年時代の鞭打ちに喩える。すなわち、フィロメラの物語上の語り声の、詩人の伝記的な声と重なることで、ジェンダーの揺らぎが起きるばかりか、鞭打ちは性的な暴力の痛みと喜びというエロティックなシステムの中に置かれる (Enterline 54-56)。レイプは鞭打ちと等価となり、フィロメラは無力な生徒と等価となり、テレウスは暴力教師と等価となるのだ。

5) ウェストミンスター・スクールの七年生が描いた「慣習」(1610年頃)³²⁾

ウェストミンスター・スクールの七年生の生徒が書いた コンスエトディナリウム “*Consuetudinarium*” (慣習) は、学校の慣習や学校生活について生徒が書いた詳しい記録で、教室でのラテン語の誦読パフォーマンスの習慣について書かれている。生徒は言語スキルの良し悪しによって、褒められるか鞭打たれるかの二者択一だったこと、また上級生や優秀な生徒が下級生・クラスメートの誦読をモニターし、教師に過ちを報告したり、逆に鞭打ちを容赦するよう教師に訴える権限を持っていたことも記録されている。こういった慣習は「日常的な劇場」と化した教室で、「まねび」による「まなび」が訓練の方法として行われていたことを示す (Enterline 33-48)。

6) セント・ポールズ・スクールに伝わるマルカスターについての逸話

同校で校長を務めたりチャード・マルカスターが、ある少年の裸の尻を他の少年たちの前で鞭打つ前に、ちょっと立ち止まりほくそ笑んで「この少年の尻と lady Birch (ムチ) の結婚に反対の者がいれば申し立てよ」と言った。別の賢い生徒が割って入って「全員が同意してはいない」と言うと、マルカスターはこの応答を気に入り、少年は鞭打ちを免れたという (Stewart 98-99; Enterline 48-49)。逸話ではあるものの、教室という演劇的な場における罰と説得とエロティイズムの関連が見られる例である。

7) マーチャント・テイラーズ・スクールの生徒、リチャード・ハルフォードが書いた詩「バーチ」(1696)³³⁾

この詩の一部を引用すると、

When finding an Unlucky Urchin
(Whose Bum's in cue for putting birch in
Down went his Breeches, up his jerking
And strait the Whipster fell to forking)
Who ne'er would goe to School, but play
The truant every other day: (underline added)
そのとき不運なはずらっ子を見つけた。
その子の尻への鞭打ちが合図されると
ズボンが下ろされ、上着がまくり上げられ
すぐに鞭打つ人がファックしたのだ。
その子はもうまともに学校に来ることができず
一日置きに無断欠席することになるのだった。

とあり、下線部の“forking”は“fucking”の婉曲表現であることから、鞭打ちと性交のつながりは「公然の秘密だった」ことがわかる (Enterline 52)。

以上に挙げたような当時の教師や生徒や元生徒が残した記録の数々からわかるのは、男らしさを涵養するためのラテン語教育、そして国にとって役立つ理想的な男性を育成するはずのグラマー・スクール制度が、「鞭打ち」という身体的処罰に支えられている一方で、その目的とは裏腹に、生徒（とそのお尻）を女性化するという矛盾を抱えていること、すなわち学校制度そのものの内部で身体がクリアな欲望の主体として発動する契機／瞬間があったことである。そして元生徒が残した著作の例に見られるように、グラマー・スクール時代の鞭打ち体験は、少年が大人になった後も長く記憶に残るのだ。先に引用した『チープサイド』3幕2場のティムと母親の会話で、ティムが鞭打ちの話題に必死で抵抗しているのも、ティムがグラマー・スクール時代の鞭打ちを恥ずべき体験として内面化しているからに他ならない。

3-2. 『チープサイド』における鞭打ちへの言及と少年俳優たち

ここでティムの鞭打ちへの言及がでてくる3幕2場にもう少し注目したい。この場面はオールウィット夫妻の赤ん坊誕生を祝う客たち、とりわけ大勢の女性客が集う場である。オールウィット氏やサー・ウォルター（赤子の本当の父親）といった男性陣が退出し、女性ばかりになったところにティムが入ってくる。ここではティムを含めて少なくとも8人の少年俳優が舞台を占める³⁴⁾。ティムは「だまされた！」(“O, I’m betrayed!” 3.2.113) と言ってすぐに退出しようとするが、この女性ばかりの空間に無理やり招き入れられて子供扱いされ、恥ずかしい鞭打ち体験を披露されるだけでなく、大勢の女性たちからキスを浴びせられる。ティムは嫌がるが、ここは同じような若い少年俳優たちで演じられる場であることを考えると、この場面では「青年／少年／女性」の区別が無効化され、ティムの身体も集団の中で女性化されているといえる³⁵⁾。

さらにこの場における少年俳優の多さを、劇団事情からも見ていきたい。本劇はエリザベス王女一座が1613年に王妃祝典少年劇団（第二次ホワイトフライヤーズ少年劇団）と合併した直後に上演された³⁶⁾。もともとエリザベス王女一座が1611年に元少年俳優たちを集めて発足した劇団であり、その二年後に新たに少

年劇団と合併した事実を考慮すると、このタイミングにおいて、当該合併劇団内には少年劇団出身の少年俳優・若手俳優が多く在籍したことになる。少年俳優たちの多くはグラマー・スクール教育を（少なくとも数年は）経験していると考えられ、例えば、1600年に誘拐されてチャペル・ロイヤル少年劇団に加わり、1613年にエリザベス王女一座に26歳で加入したネイサン・フィールド (Nathan Field, 1587-1620) も、もともとセント・ポールズ・スクールでリチャード・マルカスターの教え子だった³⁷⁾。劇団・俳優という観点も考慮すると、少年俳優が多く集う場面で披露されるお尻に関する「恥」の体験とそれにまつわるジョークは、ティム個人の経験を超えて、少年・若手俳優たちに生々しい記憶として共有された恥の経験だったのではないだろうか。

さらに『チープサイド』の中では、3幕2場の鞭打ちへの言及以外にも、ティムが出てくる場面で「お尻」に関する言及が頻出する。例えば、ティムが帰省した際、母親に「え？ 先生も来たの？ ロンドンまで連れてきたの？」(“What, is your tutor come? Have you brought him up?” III.2.126) と問われると、ティムは“up”の意味を取り違えて「2階に連れて行ってはいないよ。ドアの外で待ってるよ」(I ha’not brought him up, he stands at door” III.2.127) と答える。「このドアの外に立つ」と表現は裏口でのティムとチューターのホモエロティックな空間を含意すると同時に、肛門性交 (backdoor sex) をも想起させる³⁸⁾。また先述のように、ラテン語のレッスン場面（4幕1場）では、ラテン語の“ars” (=art) と英語の“arse” (尻) の地口が登場するし、4幕4場ではティムが「賢い男は愛のためならどんな穴でも探すよ。先生がよく知っているよ」(“a wise man for love will find the every hole; my tutor knows it.” 4.4.10-11) と述べ、この「穴」は、モルが監禁から脱出するのに利用した穴という意味から男同士の性的な穴の意味にスライドされる。

そもそも『チープサイド』に限らず、ミドルトン劇にはホモエロティックな駄洒落や筋が多いことはこれまで指摘されてきた³⁹⁾。つまり『チープサイド』に頻出する「尻」への言及は、本劇特有の現象というわけではないが、少年／若手俳優や既に成人した劇場の観客たちを含め初期近代の多くの（元）少年たちが、性的な意味を理解できるようになる前から、教室という極めて演劇的な空間でお尻を裸にされて辱めを受けてきたという事実が、ミドルトン劇の「お尻ネタ」の理解への一つの窓口になるのではないだろうか。

4. 結びに代えて—学校／劇場

本論では『チープサイド』の大学生チームがみせる「クィアなモーメント」の発現の源を、大学とグラマースクールの教育制度の内部に見出した。最後に、当時の教育において「まなび」が「まねび」であったこと、誦誦パフォーマンスの行われる教室と芝居の類似性、そしてグラマースクールにおける生徒と教師（マスター）の関係が、少年劇団の少年俳優とマスターとの関係と類似するものであったことを考慮すると、学校と劇場という二つの「制度」の類似性にも注目せずにはいられない。グラマースクールを経て大学生となり、多方向の欲望の主体となったチームの身体性や、チームと兄貴分のチューターとの密な関係は、合併したエリザベス王女一座に多くいた少年俳優や若手俳優たちの身体性・関係性とも重なってくるのではないか。つまり学校も劇団も、「口に出すべきではない恥の共有」を基盤として知識や技術を伝達しながらその「喜び」をも伝授する機関であり、制度の内部で恥と快楽という一見相反する情動を発現させてしまうクィアな場であったということが示唆されるのである。

謝辞

本稿は第59回シェイクスピア学会（2021年10月オンライン）で行われたセミナー「初期近代イングランドをクィアに読む・観る・考える」における口頭発表をもとに加筆したものである。様々な意見と示唆を下されたセミナーメンバー、およびコメントーターの本橋哲也先生に心より感謝申し上げる。

注

1) 「クィア」という語は規範にカテゴライズされない状態を表す語として広く使われることもあるが、本論ではクィア理論／批評を主に異性愛規範 (heteronormativity) を押し付ける言説・慣習・制度の内部に潜む逸脱・矛盾・綻びを暴く理論として用いる。その際、異性を欲望の対象とすることや生殖のための性的実践という規範が必ずしも超歴史的なものではない事実を前提にすると、クィア批評は同性愛 (homo)／異性愛 (hetero) という二分法が用いられる近代以前の、より微妙なニュアンスの性的欲望を捉えるのにも有効である (Melissa E. Sanchez, p. 11)。クィア批評を用いた近年の英国初期近代演劇研究の例として以下のようなものがある。Madhavi Menon, ed., *Shakespeare: A Queer Companion to the Complete Works of Shakespeare* (Durham: Duke University Press, 2011); Jeffrey Masten, *Queer Philologies: Sex, Language, and Affect in Shakespeare's Time* (Philadelphia: University of Penn-

sylvania Press, 2016); Goran Stanivukovic, ed., *Queer Shakespeare: Desire & Sexuality* (London: Bloomsbury, 2017); Jennifer Higginbotham, and Mark Albert Johnston, eds., *Queering Childhood in Early Modern English Drama and Culture* (Cham, Switzerland: Palgrave Macmillan, 2018); Melissa E. Sanchez, *Shakespeare and Queer Theory* (London: Bloomsbury, 2019).

2) Judith Butler, *Bodies That Matter* (1993) からの借用。この「モーメント」は日本語では「契機／瞬間」と訳される。以下、本書の日本語訳からの引用は、佐藤嘉幸監訳『問題＝物質となる身体』(以文社, 2021年) に基づく。

3) バトラーの言う「行為遂行性 (performativity)」とは何らかの規範を反復実践すること (2021: 4, 20) である。「ジェンダーの行為遂行性」という時には、ジェンダー規範の身体化を反復する過程を指す (316)。しかしその行為遂行は行為の前に存在すると考えられる主体によって行われるものではなく、逆にジェンダー規範の引用こそが生存可能な主体を生産するために必要である、とバトラーは言う (318)。

4) 本論における「家父長制言説」とは、家庭および社会の家父長制を維持するために女性の身体を管理・抑圧し続ける権力構造と言説の結合体の意味で用いる。バトラー風に言えば、家父長制維持のための「力が言説として行為する」こと、「権力の言説的身振り」 (2021: 308) である。ローレンス・ストーンは、16-17世紀のイングランドを「家父長制の再強化」の時代だったと言い、家長の役割が強化された要因として、血縁関係や従属関係の衰退、国民国家の台頭、カトリシズムの終焉とプロテスタントによる結婚の是認などを挙げる。Lawrence Stone, *The Family, Sex, and Marriage in England, 1500-1800* (1977), Chapter 4 and 5.

5) 本劇からの原文引用は、Thomas Middleton, *A Chaste Maid in Cheapside*, ed. by Linda Woodbridge, in *Thomas Middleton: The Collected Works*, ed. by Gary Taylor and John Lavagnino (Oxford: Clarendon Press, 2007) pp. 907-58 に基づく。日本語訳は、小野正和訳『チープサイドの貞淑な乙女』(早稲田大学出版部, 1989年) を参照しながらの拙訳である。

6) 特に「娼婦」については楠明子, 173-241頁を参照。

7) 「ジェンダー規範」そのものは19世紀以降の考え方だが、それが異性愛結婚の要求につながるとき、結婚が重視され家父長制が再強化された初期近代イングランドにおいてもある種のジェンダー規範・異性愛規範はあったと言える。

8) “[...] it is boys alone who are taught in Renaissance schools, or who are given a systematic formal education” (Walter Ong, p. 106). 当時の有名な教育者リチャード・マルカスターは、女子の教育自体には反対ではなく「やがて子供を育てるためにも」読み書きや音楽を中心に「家庭で」教わるのが望ましいとしているが、男子がパブリック・スクールで受けるような数学・物理学・哲学・論理学・修辞学などは一般女子には必要ないと述べている (Mulcaster, pp. 167-83)。他

- にも16世紀の人文学者・教育者の中には女子への教育を好意的に受け止める人もいたが、それが女子・女性の地位向上には繋がらなかった (Kathryn M. Moncrief and Kathryn R. McPherson, p. 12)。
- 9) 奉公人同士や主人と召使についてはベッドの共有がよく指摘されている (アラン・ブレイ『同性愛の社会史』田口孝夫ほか訳, 71-72頁など)。グラマー・スクールに通う子供たちも、徒歩で通うには遠すぎて寄宿学校に入るか学校の近くの下宿する場合も多かったため (Ben-Amos, pp. 54-56), 家族以外の同性とベッドを共にしていたと思われる。
- 10) この表の出身階級については O'Day (2009), p. 84 の表 “Age and origins by table status, Caius College entrants 1600-40” を参考にしている。
- 11) Karen Newman, pp. 103-4.
- 12) サー・ウォルターの独白に、彼がモルと結婚して受け取る持参金は「純金で二千ポンド」とある (IV.4.54)。チャップマン, ジョンソン, マーストン共作の『東行きだよ!』 (*Eastward Ho!*, 1605) でも金細工師の長女ガートルードに、貴族のサー・ペトロローネル・フラッシュが求婚する。
- 13) オデイは、1596~1645年のケンブリッジの学生の学士号取得率を出身階級別に集計している (2009, p. 88)。それによるとジェントリー階級出身者の学位取得率は34.4%で、聖職者階級の82.5%, 平民階級の77.4%に比べて圧倒的に少ない。ミドルトン自身もジェントルマン階級として生まれ、オックスフォード大学に進学したものの、家族の訴訟トラブル続きで金策が尽き、学位を取らずに大学を去っている (Gary Taylor, p. 35)。
- 14) 各カレッジの食堂でフェロー (専任教員) たちは一般学生より一段高いところにおかれたハイテーブルと呼ばれるテーブルで食事をとるのが伝統。特別自費生はそこに同席を許されていたが、それ以外の学生がハイテーブルに招かれるというのは、おそらく学位授与式などの特別なランチかディナーを意味しているのだろう。
- 15) 3幕でモードリンがチューターに「先日送った鴨のパイ二つ、お受け取りになりました?」 (“Did you receive the two goose-pies I sent you?” III.2.151) と尋ねている。
- 16) 最初にチューターが登場した際、モードリンが息子に「この人があなたの個人指導教師?」 (“Is this your tutor, Tim?” III.2.142) と尋ねている。
- 17) 例として、シェイクスピアの『ウィンザーの陽気な女房たち』 (*The Merry Wives of Windsor*, 1597) のウィリアム少年とエヴァンス神父の場面 (4幕1場), 『恋の骨折り損』 (*Love's Labour's Lost*, 1596) の術学者ホロファニーズ (5幕1場), ジョン・マーストンの『御意のままに』 (*What You Will*, 1601) のグラマースクールの場面 (2幕2場) など。劇の推定執筆年代は全て Martin Wiggins, *British Drama 1533-1642 A Catalogue*, vols. 3-4 に拠る。
- 18) Middleton, *A Chaste Maid in Cheapside*, ed. by Linda Woodbridge, p. 942, n 131, n 133.
- 19) オールウィットは妻とサー・ウォルター・ホアハウンドの不倫を黙認する見返りにサー・ウォルターに家族まるごと養ってもらっている。不妊に悩むキックス夫妻は、絶倫のタッチウッド・シニアが夫人に提供する「秘薬」により子宝を授かる。
- 20) 1995年にBBCの記者マーティン・バシール (Martin Bashir) がダイアナ妃に行ったインタビューで、ダイアナ妃が “there were three of us in this marriage, so it was a bit crowded” と語ったのが『パノラマ』という番組で放送され、国中に大きな衝撃を与えた。(BBCはこのインタビューを実現させるまでの手順に不正があったことを2021年5月に認め、王室に謝罪している)。
- 21) 古代の例としては、聖アウグスティヌスの『告白』の中で少年時代の鞭打ちの体験が書かれている (Ong, p. 111)。またオウィディウス, ユウェナリウス, キケロ, セネカ, ホラティウスなどの中でも「鞭打つ教師」が登場し、エジプト, ヘブライ, ヘレニズム文化の記録の中でも言及がある (Alan Stewart, p. 92)。
- 22) 4幕1場で母親がチューターに、「本当に先生、あの子がラテン語を習得するとは思いませんでしたわ。文法書に進む前に初歩の語形の本を何冊すり減らしたと思います?」 (“Truly, sir, I thought he would never a took the Latin tongue. How many accidences do you think he wore out ere he came to his grammar?” IV.1.53-55) と述べている。
- 23) 特に Alan Stewart (1997), Chapter 3; Lynn Enterline (2012), Chapter 2 を参照。
- 24) John Stanbridge, *Vulgaria sta[n]brige* (London, 1509) [EEBO, accessed on March 18th, 2022]
- 25) William Lily, *A Short Introduction of Grammar* (c. 1540) が1542年にヘンリー八世によってグラマー・スクールでの標準的なラテン語教科書と定められ、19世紀に至るまで学校現場で使われた (Elizabeth Pittenger, ‘Dispatch Quickly’ 1991: p. 397)。
- 26) Stanbridge, sig. Bvi; Stewart, p. 97. 本論の中での引用は現代綴りで表記する。以下同様。
- 27) Robert Whittinton, *Vulgaria Roberti whittintoni* (London, 1520) [EEBO, accessed on March 18th, 2022]
- 28) Whittinton, sig. Gijj; Stewart, pp. 97-98.
- 29) Thomas Tusser, *Five hundreth points of good husbandry vnitid to as many of good huswiferie* (London, 1573) [EEBO accessed on March 20th, 2022]。
- 30) Tusser, fol. 90. 該当部分はよく引用される箇所で, Elizabeth Pittenger ‘To serve the Queere’ (1994) p. 162 など参照。
- 31) George Gascoigne, *The steele glas A satyre co[m]piled by George Gascoigne Esquire. Together with The complainte of Phylomene. An elegie devised by the same author* (London, 1576) [EEBO accessed on March 20th, 2022]
- 32) 原文にはアクセスできていない。エンターラインによる引用を参照し、彼女は原文の典拠を John Sergeant, *Annals of Westminster School* (London: Me-

- thuen, 1898) としている (Enterline, p. 161, n8)。
- 33) Richard Halford, “The Birch” (1696). 原文にはアクセスできていないが Enterline, pp. 51-52 に引用あり。エンターラインによると、リチャード・ハルフォードは1687-97年にマーチャント・テイラーズ・スクールに在籍し、この詩は同校の図書館に保存されていた未出版の手書き原稿 (1694-97) の中に存在する (p. 166, n. 54)。
- 34) ミッシェル・オキャラハンは少なくとも7人とカウントしているがティムの母親をカウントしていない (O’Callaghan, p. 69)。
- 35) オキャラハンは3幕2場が女性たちの「液体（酒、尿、おねしょ、むせ返る息など）」に溢れている場であることを指摘する (pp. 81-82)。初期近代に女性の身体が「水漏れする容器 (leaky vessel)」と考えられたことについては Gail Kern Paster, pp. 23-65 を参照。
- 36) 第二次ホワイトフライヤーズ少年劇団は、主に1607-8年に活動した第一次ホワイトフライヤーズ少年劇団（もしくは King’s Revels）とは区別される。
- 37) *Oxford Dictionary of National Biography: in association with the British Academy: from the earliest times to the year 2000*. Edited by H. C. G. Matthew and Brian Harrison, vol. 19 (Oxford University Press, 2004) pp. 481-82.
- 38) Sallie Anglin, p. 26. またゲイリー・テイラーも「ミドルトン劇は同時代人の劇作家の誰よりも頻繁に、男にしる女にしる肛門性交を呼び起こす」と述べている (Taylor, p. 25)。
- 39) その嚆矢となったのがセオドア・ラインヴァンド (1994) の論で、『ミクルマス開廷期』 (*Michaelmas Term*, 1604) において beggary/buggery のような「二重の意味 (double entendre)」の語が観客の知識を前提として作中に響き渡り、ホモセクシュアルなサブカルチャーの一形態を含意していることを分析した。またエイドリアン・ブレイマーズ (2012) は、ミドルトンの市民喜劇から悲劇に至るまでのさまざまな劇におけるソドミ的対話やホモセクシュアル・メタファーを挙げ、そこにラインヴァンドのように軽快さや笑いだけを見るのではなく、ソドミーと暴力や権力構造との結びつき、およびそれに対する作者の嫌悪感をも見てとる。
- 参考文献
- <一次資料>
- Gascoigne, George. *The steele glas A satyre co[m]piled by George Gascoigne Esquire. Together with The complainte of Phylomene. An elegie devised by the same author* (London: 1576) [EEBO accessed on March 20th, 2022]
- Mulcaster, Richard. *Positions vvhetherin those primitiue circumstances be examined, which are necessarie for the training vp of children* (London: 1581) [EEBO, Accessed September 1st, 2022]
- Stanbridge, John. *Vulgaria sta[m]brige* (London: 1509) [EEBO, accessed on March 18th, 2022]
- Tusser, Thomas. *Five hundreth points of good husbandry united to as many of good huswiferie* (London: 1573) [EEBO accessed on March 20th, 2022]
- Whittinton, Robert. *Vulgaria Roberti vvhitintoni* (London: 1520) [EEBO, accessed on March 18th, 2022]
- <二次資料>
- Anglin, Sallie. ‘Subject Formation in *A Chaste Maid in Cheapside*’, *Rocky Mountain Review*, 66.1 (2012), 11-31.
- Ben-Amos, Ilana Krausman. *Adolescence & Youth in Early Modern England* (New Haven: Yale University Press, 1994)
- Blamires, Adrian. ‘Homoerotic Pleasure and Violence in the Drama of Thomas Middleton’, *Early Modern Literary Studies*. 16.2 (2012):3 [online] <http://purl.org/emls/16-2/blammidd.htm> [accessed September 3rd, 2021].
- Bray, Alan. *Homosexuality in Renaissance England*, 1982. 田口孝夫ほか訳『同性愛の社会史：イギリス・ルネサンス』(彩流社, 2013年)
- Butler, Judith. *Bodies That Matter*, 1993. 佐藤嘉幸監訳『問題＝物質となる身体』(以文社, 2021年)
- . *Gender Trouble: Feminism and the Subversion of Identity*, 1990. 竹村和子訳『ジェンダー・トラブル—フェミニズムとアイデンティティの攪乱』(青土社, 1999年)
- DiGangi, Mario. *The Homoerotics of Early Modern Drama* (Cambridge: Cambridge University Press, 1997)
- Enterline, Lynn. *Shakespeare’s Schoolroom: Rhetoric, Discipline, Emotion* (Philadelphia: University of Pennsylvania Press, 2012)
- 楠明子『英国ルネサンスの女たち—シェイクスピア時代における逸脱と挑戦』(みすず書房, 1999年)
- Leinwand, Theodore B. ‘Redeeming Beggary/Buggery in *Michaelmas Term*’, *ELH*, 61.1 (1994), 53-70.
- Levin, Richard. ‘The Four Plots of *A Chaste Maid in Cheapside*’, *The Review of English Studies*, 16.61 (1965), 14-24.
- McMillin, Scott. ‘Middleton’s Theatre’, in *Thomas Middleton: The Collected Works*, ed. by Gary Taylor and John Lavagnino (Oxford: Clarendon Press, 2007), pp. 74-87.
- Middleton, Thomas. *A Chaste Maid in Cheapside*, ed. by Linda Woodbridge, in *Thomas Middleton: The Collected Works*, ed. by Gary Taylor and John Lavagnino (Oxford: Clarendon Press, 2007), pp. 907-58.
- Moncrief, Kathryn M., and Kathryn R. McPherson. “‘Shall I teach you to know?’: Intersections of Pedagogy, Performance, and Gender”, in *Performing Pedagogy in Early Modern England: Gender, Instruction, and Performance*, ed. by Kathryn M. Moncrief and Kathryn R. McPherson. (2011, rept. London: Routledge, 2016), pp. 1-17.
- Newman, Karen. “‘Goldsmith’s ware’”: Equivalence in *A Chaste Maid in Cheapside*, *Huntington Library Quarterly*, 71.1 (2008), 97-113.

- O'Callaghan, Michelle. *Thomas Middleton: Renaissance Dramatist* (Edinburgh: Edinburgh University Press, 2009)
- O'Day, Rosemary. *Education and Society 1500-1800* (New York: Longman, 1982)
- . 'Room at the Top: Oxford and Cambridge in the Tudor and Stuart Age', *History Today*, 34 (February 1984), 31-38.
- . 'Universities and Professions in the Early Modern Period', in *Beyond the Lecture Hall: University and Community Engagement from Middle Ages to the Present Day*, ed. by Peter Cunningham, Susan Oosthuizen and Richard Taylor (Cambridge: University of Cambridge Faculty of Education, 2009), pp. 79-102.
- Ong, Walter J. 'Latin Language Study as a Renaissance Puberty Rite', *Studies in Philology*, 56.2 (1959), 103-24.
- Paster, Gail Kern. *The Body Embarrassed: Drama and the Disciplines of Shame in Early Modern England* (Ithaca: Cornell University Press, 1993)
- Pittenger, Elizabeth. 'Dispatch Quickly: The Mechanical Reproduction of Pages', *Shakespeare Quarterly* 42.4 (1991), 389-408.
- . "'To serve the Queere": Nicholas Udall, Master of Revels', in *Queering the Renaissance*, ed. by Jonathan Goldberg (Durham, NC: Duke University Press, 1994), pp. 162-89.
- Sanchez, Melissa E. *Shakespeare and Queer Theory* (London: Bloomsbury, 2020)
- Smith, Bruce. *Homosexual Desire in Shakespeare's England* (Chicago: The University of Chicago Press, 1991)
- Stewart, Alan. *Close Readers: Humanism and Sodomy in Early Modern England* (Princeton: Princeton University Press, 1997)
- Stone, Lawrence. *The Family, Sex, and Marriage in England, 1500-1800*. Weidenfeld and Nicolson, 1977. 北本正章訳『家族・性・結婚の社会史：1500-1800年のイギリス』（勁草書房, 1991年）
- . 'The Size and Composition of the Oxford Student Body 1580-1909', in *The University in Society*, vol. 1, ed. by Laurence Stone (Princeton: Princeton University Press, 1974), pp. 3-110.
- Taylor, Gary. 'Thomas Middleton: Lives and Afterlives', *Thomas Middleton: The Collected Works*, ed. by Gary Taylor and John Lavagnino (Oxford: Clarendon Press, 2007), pp. 25-58.
- Traub, Valerie. *Thinking Sex with Early Moderns*. (Philadelphia: University of Pennsylvania Press, 2016)
- 安原義仁.『イギリス大学史——中世から現代まで——』（昭和堂, 2021年）